

現代アメリカ作家の卒業式祝辞スピーチの 教材としての活用可能性

The Possibility of Using Graduation Speeches by Contemporary American Writers as Teaching Materials

林 日佳理¹

HAYASHI Hikari¹

[キーワード Keyword] スピーチ, 現代アメリカ作家, 中学校英語, 高校英語, 教材

[所属 Institution] ¹岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University)

[要旨 Abstract] 本稿は、現代アメリカ作家による卒業式祝辞スピーチを中学・高校英語の教材として活用する可能性を考察するものである。近年、岐阜県内の中学校・高校で使用される教科書において、著名人のスピーチが教材として収録されているが、それらの扱いは補助的なものとどまり、教材としての意義が最大限理解され活用されているとは言い難い。そこで本稿は、アメリカの大学で行われる「卒業式祝辞スピーチ」を基盤としながら、どのようなスピーチを選択すべきか、それらを扱う意義はどこにあるのかについて、David Foster Wallace、Ursula K. Le Guin、Audre Lorde、そしてChimamanda Ngozi Adichieの卒業式祝辞スピーチを例としながら検証していく。これらのスピーチを構成する、年齢や性別や人種の違いを含む様々な立場の人の言葉にふれることで、世界観や社会的立場の基本的な問題点を知ることができる。そのため、これらを教材として活用することは、英語の語法やスピーチの構成についての学びだけでなく、これからの人生を歩んでいくうえでの年長者からのアドバイスとしても大きな意義のあるものである。

はじめに

近年、岐阜県で使用される中学・高校英語の教科書において、英語圏の著名人のスピーチが教材として取り上げられるようになってきている。たとえば、中学三年生用の *New Crown 3* では、Martin Luther King, Jr. の “I Have a Dream” のスピーチがひとつのレッスンの主題となり、同じく中学三年生用の *New Horizon 3* では Apple 社の創業者 Steve Jobs のスピーチが “A Graduation Gift from Steve Jobs” というタイトルのもとリーディングの補助教材として収録されている。さらに、高校二年生向けの *Crown II* においては、アメリカの小説家 George Saunders の卒業式祝辞スピーチが “optional lesson” として取り上げられている。これらのスピーチの教材としての注目は、近年の英語教育におけるコミュニケーションの重視の傾向を反映していることだろう。2021年度から全面実施された中学校の新学習指導要領では、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の四つの技能の中で、「話すこと」が「やり取り」と「発表」とに細分化して示された。たしかに、実際に公共の場で話された、社会的インパクトを持つ英語の文章は、学習者の興味を引き付けたり、効果的なスピーチの方法を学んだりするためのお手本として大きな教育的効果を期待できる。しかし教育現場においてこれらのスピーチ教材は、部分的な引用にとどまったり、補助教材であるために実際の授業では使用を見送られたりなど、その価値が十分に認識されているとは言い難い。

そこで本稿では、英語教材としてのスピーチの可能性を広げる方法について考察していきたい。どのようなスピーチを選択すべきか、授業内で時間をとってそれらを扱う意義はどこにあるのか、またスピーチを活用した実践において学習者の興味を引き付け、英語運用能力を向上させるためのポイントはどこにあるのか、などについて、いくつかの例を挙げながら検証していく。ここで本論文が注目するのは、主にアメリカの大学で行われる「卒業式祝辞スピーチ」である。先述した Steve Jobs や George Saunders のスピーチは

このジャンルのものだ。「卒業式祝辞スピーチ」とは、主にアメリカの大学の卒業式で、著名人のゲストを招き、卒業生に対するメッセージを含むスピーチをしてもらうものである(“graduation speech”、“commencement speech”とも呼ばれる)。小笠原はのどと遠藤昌子による先行研究(2010)にもある通り、17世紀のハーバード大学での卒業式ではじめられたこのスピーチは、21世紀に至るまで続く伝統的な慣例になっており、毎年多くの大学で名スピーチが誕生している(7-9)。中でも、先に挙げた Steve Jobs のスピーチや Barack Obama のもの(2008年5月にウェズリアン大学にて行われた)は特に有名になり、スピーチが実施された大学だけでなく、大学のホームページや公式YouTubeチャンネル等を通して世界中の人々に共有され、親しまれている。さらに、これらの優れた卒業式祝辞スピーチの中でも、本稿は作家によって行われたものに注目することを提案する。小説家や詩人のスピーチは、他の有名俳優や政治家のそれに比べて、文体や文章構成がわかりやすく、また社会的関心に密着した内容の豊かさをも兼ね備えているように思われるからである。この利点をもつ George Saunders の祝辞スピーチを *Crown II* に採用したのは、コミュニケーション重視の英語教育において、軽視されがちな英語文学分野の貢献を示したのものとして、大きな一歩であると考えられる。本論文はこの勢いに乗りながら、ほかにも英語教材として優れた学習効果が期待できる作家のスピーチが豊富に存在することを具体例を挙げながら示し、補助的な位置に追いやられがちなこれらの教材を積極的に授業に取り入れるべき意義を探る。

1. David Foster Wallaceのスピーチ

まず、1958年生まれの George Saunders と世代的にも著作の傾向的にも近い David Foster Wallace (1962-2008) の卒業式祝辞スピーチを取り上げる。David Foster Wallace は、1000ページを超える長大な小説 *Infinite Jest* (1996) など知られる、現代アメリカ文学を代表する作家のひとりである。難解で読者を圧倒する小説作品とは別に、彼のエッセイは社会的な問題からテニスやラップ音楽に至るまで、幅広い対象について親しみやすい語り口で描写する。中でも、生きたままボイルされるロブスターについて考える “Consider the Lobster” や、豪華客船クルーズを素直に楽しめない葛藤を描いた “A Supposedly Fun Thing I’ll Never Do Again” などの人気が高い。ここで取り上げる “This Is Water” という卒業式祝辞スピーチも、その系譜を引いた親しみやすくコミカルなものであると同時に、そのメッセージは真摯でナイーブなものである。

そもそも学業の集大成である卒業式にて、その祝辞スピーチが “commencement speech” 「始まりのスピーチ」と呼ばれることは矛盾していると感じられるかもしれないが、これから実社会へ出ていく若者たちの人生の門出を記念するという意味合いを持ち、年長の者からのアドバイスという側面を持つ。George Saunders のスピーチと同じく、David Foster Wallace が2005年にケニオン・カレッジで行った卒業式祝辞スピーチも、卒業生たちが未来を生き抜くために知っておくべきことを助言するというスタイルをとっている。Wallace は、いわゆる「偉い人のおはなし」に含まれる「小ネタ」の形をとって、ある “didactic little parable-ish stor[y]” から始める。それは魚に関する以下のようなものである：

There are these two young fish swimming along and they happen to meet an older fish swimming the other way, who nods at them and says “Morning, boys. How’s the water?” And the two young fish swim on for a bit, and then eventually one of them looks over at the other and goes, “What the hell is water?” (3-4)¹

(若い魚が二匹、仲良く泳いでいる。ふとすれ違ったのが、向うから泳いできた年上の魚で、二匹にひょいと会釈して声をかけた。「おはよう、水はどうだい?」そして二匹の若い魚はしばらく泳いでから、はっと我に返る。一匹が連れに目をやって言った。「いったい、水って何のこと?」)

自分の周りに水があるということを認識していない魚についてのジョークから Wallace は、「あたりまえ」と

¹ Wallace のスピーチについて、英文引用のページ数は、2009年に Little, Brown より出版された書籍にもとづく。なお、日本語訳は阿部重夫によるものを参考としながら、執筆者が一部修正を施したものである。

されている現実を疑わず漫然と生きていくことに対して警鐘を鳴らす。なぜなら、何も意識せずに過ごすことは、自分が生まれ落ちた環境の“default setting”(38)に黙従し、状況が厄介になっても何もできずに自滅してしまうからである。そうではなく、自分が何を信じるか、何に価値を置くかを自分自身で選択できるように、周囲の状況に目を向けることの必要性を、Wallaceは“this is water”というフレーズに託して伝えようとしているのだ。

このアドバイスは、単に抽象的で寓意的な道徳律ではなく、現実に関心を疲弊させる社会生活において、30歳まで、そして50歳まで、生き延びていくための実践的なものであるとWallaceは言う(“It is about making it to thirty, or maybe even fifty, without wanting to shoot yourself in the head.” [130])。そのことが、スピーチ後半に現れるスーパーマーケットでのうんざりさせられるような買い出しや道路をふさぐ渋滞の列のたとえ話により明確になる。

It's the end of the workday and the traffic's very bad, so getting to the store takes way longer than it should, and when you finally get there, the supermarket is very crowded, because of course it's the time of day when all the other people with jobs also try to squeeze in some grocery shopping, and the store is hideously, fluorescently lit, and infused with soul-killing Muzak or corporate pop, and it's pretty much the last place you want to be, but you can't just get in and quickly out. You have to wander all over the huge, overlit store's crowded aisles to find the stuff you want, and you have to maneuver your junky cart through all these other tired, hurried people with carts, and of course there are the glacially slow old people and the spacey people and [...] but anyway, you finally get to the checkout line's front, and you pay for your food, and wait to get your check or card authenticated by a machine, and you get told to “Have a nice day” in a voice that is the absolute voice of *death*. And then you have to take your creepy flimsy plastic bags of groceries in your cart with the one crazy wheel that pulls maddeningly to the left, all the way out through the crowded, bumpy, littery parking lot, and try to load the bags in your car in such a way that everything doesn't fall out of the bags and roll around in the trunk on the way home, and then you have to drive all the way home through slow, heavy, SUV-intensive, rush-hour traffic, et cetera, et cetera. (69-72)

(平日の帰宅ラッシュで道路は大渋滞、店にたどりつくまで普段よりやけに時間がかかる。やっと着いたスーパーがまた大混雑。もちろんそういう時間帯だからほかの客もみんな仕事帰りに食材を買おうと、ごった返している。店はぞっとするほど蛍光灯に照らされて、耳障りなBGMやらCMポップスを流しっぱなし。この世で最もいたくない場所だけど、なんとか店に入り込んでさっさと立ち去るしかない。あなたは欲しい食材を探してまぶしすぎる照明の下、混雑した通路をすみずみまでさまよわなければならない。ほかの客もみんな疲れた顔で急ぎながらカートを押している。あなたはポンコツのカートでどうにか隙間を縫っていかなければならない。もちろん氷河みたいのにのろろと動く老人やぼんやりたたずむ人々 [もいる。] [...] それでもとにかくやっと列の先頭に来て、食材の代金の支払いに小切手かカードを差し出して機械に認証されるのを待っていると「ゴキゲンヨウ」だなんてレジ係に真っ暗な死の声で返される。それから食品を放り込んだ気色悪い薄っぺらなポリ袋をカートに入れて運ばなければならないのだけど、車輪が一つ壊れていて狂ったようにがたつきすぐ左に寄ってしまう。それをどうにか押していき、人の行きかうでこぼこの駐車場でポリ袋を車のトランクに入れる、それも帰宅途中で袋から中身が飛び出して散らばったりしないように丁寧に。そしてあなたは家まで車を走らせるけれど、帰りもまた大渋滞、SUVだらけのラッシュアワーの道路で途方に暮れる…等々。)

ここでは、だらだらと伸ばした文章で苛立たしい日常の一コマを描いている。スーパーマーケットの強すぎる照明やうるさい有線放送に辟易するところや、ショッピングカートががたついていていつも左へずれていくことなど、細かすぎる描写がかえってリアルで、卒業式の祝辞ではまず言及しないような些末な内容が吐

露されるためにスピーチ当日に爆笑を誘ったポイントでもある。Wallaceはこの挿話によって、先の魚のたとえ話を人間の日常の話に接続させる。魚が認識できない水——あたりまえの事実——は、ここではひたすら自己中心的な「デフォルト設定」——すべてのものが自分の邪魔をしようとしていると感じる——と読み替えられ、そのデフォルト設定を認識できていなければ、考え方をすることも不可能で、退屈きわまりない日常に神経をすり減らし続けなければならないことが予想される。そうならないために、何でも自己中心的に考えるデフォルト設定を見直し、世界の見え方を自分で選択していかなければならないとWallaceは言う。その一つの実践例として、彼は別の「設定」（すなわち、別の「水」）があるかもしれないとイメージしてみるように誘導する。つまり、自分の邪魔をしてくるとしか思えなかった人たちが実はそれぞれ同情すべき事情を抱えていて、彼らの立場に立ってみれば自分こそが邪魔者であるかもしれないという可能性について思いを巡らすようにと言うのだ。

The thing is that there are obviously different ways to think about these kinds of situations. In this traffic, all these vehicles stuck and idling in my way: It's not impossible that some of these people in SUVs have been in horrible auto accidents in the past and now find driving so traumatic that their therapist has all but ordered them to get a huge, heavy SUV so they can feel safe enough to drive; or that the Hummer that just cut me off is maybe being driven by a father whose little child is hurt or sick in the seat next to him, and he's trying to rush to the hospital, and he's in a way bigger, more legitimate hurry than I am—it is actually *I* who am in *his* way. (84-85)

(大事なのは、もちろん、この種の状況についてまったくちがう思考法があるということです。道路で全車が立ち往生しエンジンをふかしながら僕の行く手を邪魔しているのだけど、別の見方をすることだって不可能じゃない。SUVに乗っている連中の中には、過去に凄惨な交通事故に遭って以来運転にトラウマを負ってしまって、安心感を与えるような巨大で重厚なSUVをお買いなさいとセラピストに命じられた、とか。あるいはさっき僕の前に割り込んだハマーにしたって、隣に乗せている子供が怪我や病気をしてしまったために、病院へ一目散に車を走らせる父親なのかもしれない。ある意味では、急ぐ理由があるのは僕よりも彼の方で、邪魔なのは実は僕の方なのではないのか、とか。)

ここでは、日常に想像力——「もしかしたら～かもしれない」——を適用する例が示されている。このような見方を自分で選択することこそ、うんざりさせられるような世界で生き延びていくために必要なことなのだWallaceは言う。彼はさらに念を押すように、スピーチの最後で“this is water”というごく簡単なフレーズを繰り返し、私たちが今見ている現実、空気のように当たり前になってしまっている「デフォルト設定」に左右されているのだと強調する。Wallaceのスピーチは、一般的なスピーチの型とその中に含まれる「おはなし」あるいは「小ネタ」を駆使することによって、身近な比喻によってメッセージを確実に伝えようとするものである。

Wallaceのこのスピーチは約4000語のボリュームがあるかなり長いものである。全ての内容を理解するには、一定以上のレベルの高校でないと難しいだろうが、序盤の“this is water”のエピソード部分のみを英語で提示し、ディスカッションの素材にするなどの方策をとれば十分に中学校の英語授業でも扱えると考えられる。重要なのは、英語の運用能力を高めることだけでなく、こういったスピーチが学習者の将来設計や進路選択、人生を生き抜く姿勢にかかわる内容を備えているということである。

2. Ursula K. Le Guinのスピーチ

JobsやSaunders、Wallaceと、ここまで紹介してきたスピーチの話し手は男性が続いたが、ここからは女性のものに注目したい。なぜなら、若い世代がこれから生きていくために知っておくべきことは、女性の話し手にとって男性の話し手とはまた別のものとなることがあるからだ。そのことがよくわかるのが、Ursula K. Le Guin (1929-2018) による、一風変わったタイトルの“A Left-Handed Commencement Address”である。

なぜ「左きき」なのか、それはこのスピーチが、マジョリティではないしばしば無視されてきた存在に特化したものだからである。そして1983年にミルズ・カレッジ²でこのスピーチを行ったLe Guinにとって「無視されてきた存在」とは、女性のことを指す。とくに、高等教育を受けたにもかかわらず、男性中心の社会の中で適応できるか排除されるかの瀬戸際に立たされる若い女性たち（つまりミルズ・カレッジの卒業生たちを念頭に置いている）に、ヒエラルキー志向の男たちの言葉ではなく、そのヒエラルキーから外れた女の言葉で語り掛けることに意味があるとする。“I want to thank the Mills College Class of '83 for offering me a rare chance: to speak aloud in public *in the language of women.*” というのがスピーチの最初の言葉である（強調は執筆者による）。Le Guinは、アニメ化もされた『ゲド戦記』シリーズのようなファンタジーやSF小説で知られるが、もっとも有名な作品のひとつである *The Left Hand of Darkness*（邦題『闇の左手』）（1969）では両性具有の異星人を扱うなど、ジェンダーについて独自の観点から積極的に発言してきた。このスピーチもその延長線上にあり、男性優位の世界の中でこれまで黙殺されてきた女性たちが生きる方法に焦点を当てる。

Well, we're already foreigners. Women as women are largely excluded from, alien to, the self-declared male norms of this society, where human beings are called Man, the only respectable god is male, and the only direction is up. So, that's their country; let's explore our own. [...] I'm talking about society, the so-called man's world of institutionalized competition, aggression, violence, authority, and power. (180)

（どのみち私たちは異国人ですね。女性は女性であるがゆえ、男性が自ら宣言したこの社会の規範から除外され、遊離しています。この社会では人間は男（マン）と称し、尊敬すべき唯一の神は男性で、唯一の方向は上昇なのです。そうです。それは彼らの国なのです。私たちは私たち自身の国を探し求めようではありませんか。[...] 私は社会のこと、いわゆる人間の制度化された競争、侵略、暴力、権威、および権力の世界のことをお話しているのです。[196]）³

このような、女性であるために弱者の位置に置かれた経験については、SaundersやWallaceには決して語ることでできないものだろう。これらは、社会の中で「左きき」のように無視された経験のある者にしか言えないことだ。ここに、1960年代頃にフランスの女性作家たちが中心に構想した「エクリチュール・フェミニン」（女性が男性の言葉を借りるのではなく、女性自身の言葉で語ること）という思想的背景を読み込むことも可能だろう。このようなラディカルな主張は、2020年代の社会的な価値観や、中学生・高校生のジェンダーの感覚から見れば、いくぶん古く見えるかもしれない。しかし、20世紀後半のフェミニズム思想的な表現にふれることは、その当時苦しんでいた女性たちにとってのみ重要だというわけではなく、時代も性も関係なくあらゆる困難の当事者に敷衍して考えられる可能性がある。とくに以下の部分は、効率的な成功の陰で黙殺されてきたあらゆる弱者に対する独自の応援メッセージと受け取れる。

No, I do not wish you success. I don't even want to talk about it. I want to talk about failure.

Because you are human beings, you are going to meet failure. You are going to meet disappointment, injustice, betrayal, and irreparable loss. You will find you're weak where you thought yourself strong. You'll work for possessions and then find they possess you. You will find yourself—as I know you already have—in dark places, alone, and afraid.

What I hope for you, for all my sisters and daughters, brothers and sons, is that you will be able

² ミルズ・カレッジはカリフォルニアにある私立大学である。伝統のある女子大学で、1990年に共学化が決定されたが学生のストライキにより撤回された。2014年には、トランスジェンダーの学生を受け入れるアメリカ初の大学となった。

³ Le Guinの文章の訳は、篠目清美によるものを引用した。

to live there, in the dark place. To live in the place that our rationalizing culture of success denies, calling it a place of exile, uninhabitable, foreign. (178-79)

(そう、私はみなさんに御成功を、とは申しません。成功についてお話する気もありません。私は失敗についてお話したいのです。

なぜならみなさんは人間である以上、失敗に直面することになるからです。みなさんは失望、不正、裏切り、そして取り返しのつかない損失を体験することでしょう。自分は強いと思っていたのに実は弱いのだと気づくことがあるでしょう。所有することを目指して頑張ったのに、所有されている自分に気づくことでしょう。もうすでに経験ずみのことと思いますが、みなさんは暗闇にたったひとりで怯えている自分を見出すことでしょう。

私がみなさん、私の姉妹たちや娘たち、兄弟や息子たちすべての人々に望むことは、そこ、暗闇で生きていくことができますように、ということなのです。成功という私たちの合理的な文化が、追放の地、居住不可能な異国の地と呼び否定しているそんな土地で生きていくことを願っています。[195-96])

ここでは、「闇」の中で生きることの可能性が説かれている。成功や幸福だけがすべてではないと、(おそらくLe Guinのような別世界を探索するSF作家にしか思いつけないような)オルタナティブの選択肢を挙げるのである。このオルタナティブの考え方は、男性か女性かといった区分だけでなく、ますます多様化を極める現代のジェンダーや性的志向、いじめ、家庭のトラブルや経済的な問題などの様々な状況の中で、画一的な上昇志向を押し付けようとはせず、「逃げ道」を与える。この点でLe Guinの言葉は、一般的なスピーチや「おはなし」とは違った角度で、年若い学習者たちの印象に残るだろう。

文章の特徴としては、SaundersやWallaceのスピーチと比べてかなり短い(1189語)ことがあげられる。音声素材は残っていないが、文の構成は明確であり、いくつかの背景的な知識(マーガレット・サッチャーやロナルド・レーガンなどの政治的人物名、分離主義[separatism]などのターム)を補ってやれば、高校生にも全体が理解可能なものであると思われる。あるいはWallaceのものと同様に、ここに挙げた箇所を中心に提示し、学習者自身の考えや経験を共有するきっかけとしても十分な有用性が見込まれる。

3. Audre Lordeのスピーチ

キング牧師の“I Have a Dream”の演説が日本の中学・高校における英語の教材として高い価値をもつ理由は、その文章の形式のみならず、やはり黒人差別という歴史的な問題を真正面から扱っているという内容にあるだろう。このような史実にかかわるスピーチを英語の授業活動の中で取り入れることには、言語的な能力を向上させるためだけでなく、世界の事象を知らせるという面での功績も大きい。この関連において紹介したいのが、黒人女性で同性愛者であることを公言している詩人Audre Lorde (1934-1992)の卒業式祝辞スピーチである。このスピーチは1989年、オハイオ州のオーバリン大学で行われた。オーバリン大学は、1833年の設立当初から女性の学生を受け入れており、また1835年という比較的早い段階から有色人種の学生を受け入れていた大学として知られている。

Lordeのスピーチは、数字やパーセンテージなどのデータをリストアップしていく手法をとる。たとえば、以下の箇所を見てみよう。

Ricky Boden, eleven, Staten Island, killed by police, 1972. Clifford Glover, ten, Queens, New York, killed by police, 1975. Randy Evans, fourteen, Bronx, New York, killed by police, 1976. Andre Roland, seventh grader, found hanged in Columbia, Missouri, after being threatened for dating a white girl. The list goes on. (215)

(1972年、リッキー・ボーデンというスタテン・アイランド出身の11歳の少年が警察に殺害されました。1975年、クリフォード・グローバーというニューヨーク州クイーンズ出身の10歳の少年が警察に殺されました。1976年、ランディ・エバンスというニューヨーク州ブロンクス出身の14

歳の少年が警察に殺されました。アンドレ・ローランドという中学1年生の少年が、ミズーリ州コロンビアで、白人女性と付き合っていることで脅され、首を吊られて発見されました。このリストは延々と続きます。) ⁴

ここでは、警察や公衆によって殺害された黒人の少年の名前が、場所と年号をつけて羅列される。“The list goes on” とあるように、これらの短い文に要約された惨状がいかにも多く、終わりなく続いているのが示される。さらに、次の個所でもデータの羅列がなされるが、淡々としたリストアップの手法の裏には、強い憤りがあることが示唆される。

It is not enough to believe in justice. The median income for Black and Hispanic families has fallen in the last three years, while the median income of white families rose 1.5 percent. We are eleven years away from a new century, and a leader of the Ku Klux Klan can still be elected to Congress from the Republican party in Louisiana. Little fourteen-year-old Black boys in the seventh grade are still being lynched for dating a white girl. It is not enough to say we are against racism. (216)
(正義を信じるだけでは不十分なのです。黒人とヒスパニック系の家庭の所得の中央値は過去3年間で低下し、白人家庭の所得の中央値は1.5%上昇しました。新しい世紀まであと11年にまできているのに、ルイジアナ州の共和党からクー・クラックス・クランの指導者がいまだに議会に選出されています。14歳の小さな黒人少年が、白人女性とデートしただけでいまだにリンチされています。人種差別に反対しているというだけでは不十分なのです。)

この引用部分の始めと終わりに “It is not enough to believe in justice,” “It is not enough to say we are against racism” とあるように、Lordeはデータを述べる合間に「行動の必要性」をさしこむ。立派な考え方をしている、行動に移さなければ、自分たちマイノリティの命は依然として奪われ続けてしまうと訴えているのである。この点はやはり、「考え方を変えること」の重要性を説くWallaceのスピーチと違うところであり、Lordeのアクティヴィスト的な切迫性を感じられるところであろう。

*New Crown 3*のレッスン5においてキング牧師の演説が部分的に引用され(約4文)、レッスンの残りの部分はその背景を説明する文章になっているように、Lordeのスピーチも部分的に取り上げることが可能だろう(例えば上記の二つの引用箇所)。21世紀になってもやむことのない白人警官の黒人に対する暴力や、それに関連したBlack Lives Matter運動、あるいは世界中で続く困窮問題や経済的不平等といった話題に目を向けるきっかけとして、このスピーチを教材とすることには意義があるだろう。その意味で、現代社会や世界史分野などの社会科系科目の授業と連携した活用も考えられる。

また、Lordeの主張や立場は、彼女の詩作品にも共通してみられるものであるため、さらに発展的な教材として彼女の詩を紹介することも可能だろう。Lordeの1978年発表の詩“A Litany for Survival”をはじめ、彼女の代表的な詩は簡潔で読みやすく、詩集やアンソロジーのみならずPoetry Foundationのホームページからもアクセスできる⁵。彼女のすべての著作における重要なテーマは「生き延びること」であり、詩やスピーチ、エッセイなどの短い作品にも表れている。上述のスピーチと合わせてそれらの文章にあたることも、学習者にとって黒人の歴史と生活にふれる機会を提供するものとして大きな意義があるだろう。

4. Chimamanda Ngozi Adichieのスピーチ

LordeやLe Guinのスピーチはどちらも内容的に優れたものであるが、やはり1980年代のものであるため、

⁴ Lordeからの引用の日本語はすべて拙訳による。

⁵ Poetry Foundationは、詩の振興を目的とした公的な独立組織であり、主に英語圏の詩人の作品を多く紹介するサイトを運営している。Lordeの“A Litany for Survival”の詩は以下に掲載されている。

<https://www.poetryfoundation.org/poems/147275/a-litany-for-survival>

現在の中学生・高校生にとっては同時代性を感じにくいかもしれない。そこで最後に、彼女たちのメッセージを引き継ぎつつより現代的でアクセスしやすいChimamanda Ngozi Adichieの卒業式祝辞スピーチを取り上げる。Adichieは1977年にナイジェリアで生まれ、19歳の時にアメリカに渡った黒人女性小説家であり、長編小説 *Purple Hibiscus* (2003) や *Americanah* (2013) などすでに多くの著書を出版している。キャリアの始めから、社会に向けた啓発的なスピーチを行っており、特に二つのTEDトークが非常に有名である。“The Danger of a Single Story” (邦題:「シングルストーリーの危険性」) と “We Should be All Feminists” (邦題:「男も女もみんなフェミニストじゃなきゃ」) というもので、TEDのホームページ等によって世界中に発信されている⁶。

今回取り上げる卒業式祝辞スピーチは、2015年にウェルズリー・カレッジというマサチューセッツ州の名門私立女子大学で行われたものである。YouTubeのウェルズリー・カレッジ公式チャンネルでスピーチの映像が公開され、また大学ホームページにはスピーチの全文が掲載されている。このスピーチは5つのパートに分かれていて、それぞれAdichie自身の経験に根差したエピソードをきっかけに展開される。たとえば、化粧のことや彼女自身の母親について、あるいは医学部を辞めて小説家になる決意をしたことなどである。自身の進路選択について振り返る個所では、Adichieは自分の経験から以下のようなメッセージへとつなげていく。

My writing might not have ended up being successful. But the point is that I tried.

We can not always bend the world into the shapes we want but we can try, we can make a concerted and real and true effort. And you are privileged that, because of your education here, you have already been given many of the tools that you will need to try. Always just try. Because you never know.

And so as you graduate, as you deal with your excitement and your doubts today, I urge you to try and create the world you want to live in.

Minister to the world in a way that can change it. Minister radically in a real, active, practical, get your hands dirty away.

(私の執筆活動も成功しなかったかもしれませんが。しかし、重要なのは私が挑戦したということです。

必ずしも世界を思い通りに変えることはできませんが、努力することはできますし、協調して真の努力をすることもできます。そして、あなたの特権は、ここでの教育のおかげで、挑戦するために必要なツールの多くをすでに与えられていることです。とにかくやってみてください。なぜなら、結果はわからないからです。

皆さんが卒業するにあたって、現在のわくわくと疑念に対処するとき、私は皆さんに、自分が生きたいと思う世界を作ってみてほしいと思います。

世界を変えることができる方法で、世界に貢献してください。実際に、積極的に、実用的に、自分の手を汚しながら、根本的に奉仕してください。)⁷

自分の生きていきたい世界を作ることに挑戦してみることを、自分の手でそれを実行してみることを、ここでは真正面から取り扱っている。しかし彼女はこのような抽象的なアドバイスだけでは終わらない。Adichieの

⁶ 「シングルストーリーの危険性」

https://www.ted.com/talks/chimamanda_ngozi_adichie_the_danger_of_a_single_story?language=ja

「男も女もみんなフェミニストじゃなきゃ」

https://www.ted.com/talks/chimamanda_ngozi_adichie_we_should_all_be_feminists?language=ja

⁷ Wellesley Collegeのホームページから引用

(<https://www.wellesley.edu/events/commencement/archives/2015/commencementaddress>)。日本語は拙訳による。

スピーチの特徴は、この「どう生きるべきか」という理想像を具体的な仕事や生活に展開してみせることである。上記に引用した文に続けて、彼女はこう述べる。

Write television shows in which female strength is not depicted as remarkable but merely normal.

Teach your students to see that vulnerability is a HUMAN rather than a FEMALE trait.

[...]

Campaign and agitate for paid paternity leave everywhere in America.

Hire more women where there are few. But remember that a woman you hire doesn't have to be exceptionally good. Like a majority of the men who get hired, she just needs to be good enough. (女性の強さが目立ったものではなく、単に普通のこととして描かれているテレビ番組を書きましよう。

脆弱性は女性の特性ではなく、人間の特性であることを学生に教えましょう。

[...]

アメリカ全土で有給の、父親の育児休暇を求めるキャンペーンを展開しましょう。

女性が少ないところでは、より多くの女性を雇いましょう。ただし、採用した女性が特別に優秀である必要はありません。雇われた男性の大半がそうであるように、彼女も十分な能力を持っていればいいのです。)

ここでは、もし聴衆のウェルズリー・カレッジ卒業生がテレビ業界に就職したら、教員になったら、人事採用係になったら、という仮定で、とりうる行動の例を提示している。スピーチの映像からも、このような具体的なアドバイスへの賛同が聴衆の間に広がっていることがわかるだろう。彼女のスピーチは、理想的な概念について話すだけでなく、そこからどうしたらいいのかを分かりやすく伝えるのである。そして最後に、このような姿勢を「姉からのアドバイス」として締めくくる。

I would very much like to be your honorary big sister today.

Which means that I would like to give you bits of advice as your big sister:

All over the world, girls are raised to be make themselves likeable, to twist themselves into shapes that suit other people.

Please do not twist yourself into shapes to please. Don't do it. If someone likes that version of you, that version of you that is false and holds back, then they actually just like that twisted shape, and not you. And the world is such a gloriously multifaceted, diverse place that there are people in the world who will like you, the real you, as you are.

(今日はぜひ、あなたたちの名誉あるお姉さんになりたいと思います。

つまり、お姉さんとしてちょっとしたアドバイスをさせていただきたいと思います。

世界中の女の子は、人に好かれるように、人に合わせて自分を型にねじ込むように育てられています。

喜ばせるために自分を型にねじ込まないでください。そんなことはやめてください。もし誰かがあなたのそのバージョン、偽りで我慢しているあなたのバージョンを好きになったら、その人は実はその歪んだ形が好きだけで、あなたではないのです。そして、世界は素晴らしく多面的で多様な場所なので、世界には本当のあなたを好きになってくれる人がいるのです。)

Adichieの「姉」としてのアドバイスは、周りの期待に合うように自分を型におしこむな、ということである。これは、フェミニズム的な抵抗のメッセージでもあり、同時に、性別にかかわらずすべての人間に向けたエンパワメントのメッセージとも考えられる。つまり、これまでに見たLe GuinやLordeのスピーチの、女性であることや黒人であることに基盤を置いたラディカルな指摘と、Wallaceのデフォルト設定を疑えというより

普遍的な忠告とを兼ね備えたアドバイスなのである。

これらのスピーチには、行われた大学や想定される聞き手、時代や性別や人種の点で違いはあるが、年長の者から年少の者へ向けてのメッセージという点は共通している。卒業式祝辞スピーチを英語教材として扱うことで、語法や事実を知らせるだけでなく、より長い年数を生きてきた教員から若い生徒へ伝えたいことの代弁者として活用することも可能なのである。

おわりに

現代アメリカ作家による卒業式祝辞スピーチは、聞き手の興味を引き付けるような「おはなし」あるいは「小ネタ」としてのエピソードから、社会全体の考え方や生き方についての提言へと広がる可能性を持った文章である。これらのスピーチを行う様々な立場の人の意見にふれることで、世界観や社会的立場の基本的な問題点を知ることができる。そのため、これらを教材として活用することは、英語の語法やスピーチの構成についての学びだけでなく、これからの人生を歩んでいくうえでの年長者からのアドバイスとしても大きな示唆を与えるものである。「凝り固まった世界観を変えよ」というこれらのメッセージはまた、なぜ英語を学ぶのか、なぜ言語を学ぶのか、なぜ言語で表された他者の考えにふれる必要があるのかといった、学習を続けていく根本的な意義についても考えるように促すだろう。試験のための暗記や機械的な翻訳ではなく、言語を学ぶ真の意味について考えるきっかけを与えてこそ、「英語を教える」ことになるのではないだろうか。

参考文献

- 小笠原はるの・遠藤昌子 (2010) 「アメリカの大学におけるコメンツメントスピーチ (二)」 『比較文化論叢』 (札幌大学文化学部紀要) 第24号、pp. 7-64.
- 三省堂 (2018) *Crown English Communication II New Edition*.
- 三省堂 (2021) *New Crown 3*.
- 東京書籍 (2020) *New Horizon English Course 3*.
- 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領 外国語編』 東山書房.
- Adichie, Chimamanda Ngozi (2003) *Purple Hibiscus*. Algonquin Books.
- (2013) *Americanah*. Knopf.
- (2015) “Chimamanda Ngozi Adichie Addressed the Class of 2015 at Wellesley’s 137th Commencement Exercises.” *Wellesley College*,
<https://www.wellesley.edu/events/commencement/archives/2015/commencementaddress>.
- Le Guin, Ursula K. (1989) *Dancing at the Edge of the World*. Grove Press.
 (アーシュラ・K・ル＝グウィン (2006) 『世界の果てでダンス』 篠目清美訳、白水社.)
- (1969) *The Left Hand of Darkness*. Ace Books.
- Lorde, Audre (1978) “A Litany for Survival.” *The Collected Poems of Audre Lorde*, Norton.
- (1989) “Commencement Address.” *I Am Your Sister: Collected and Unpublished Writings of Audre Lorde*, edited by Rudolph P. Byrd, Johnnetta Betsch Cole, and Beverly Cuy-Sheftall, Oxford UP, 2009.
- Saunders, George (2014) *Congratulations, By the Way*. Random House,
 (ジョージ・ソーンダース (2016) 『人生で大切なたったひとつのこと』 外山滋比古・佐藤由紀訳、海竜社.)
- Wallace, David Foster (1997) *A Supposedly Fun Thing I’ll Never Do Again*. Little, Brown.
- (2005) *Consider the Lobster*. Little, Brown.
- (2009) *This Is Water*. Little, Brown.
 (デヴィッド・フォスター・ウォレス (2018) 『これは水です』 阿部重夫訳、田畑書店.)